

○樋口 寿*¹、浅野真智子*²、大野佳美*³、黒川由美*⁴、平井和子*⁴

(^{*1}大阪女子学園短大、^{*2}大阪国際女大、^{*3}武庫川女大、^{*4}大阪市大)

【目的】 若年齢期からの食生活の偏りが指摘され、生活習慣が種々の疾病の遠因となることから飽食時代の健康問題が重要な課題となっている。また、社会環境の変化に伴って生じた家族や社会に対する意識の変化や生活価値観が、若年層の心身の健全な育成に影響を与えたと考えられる。そこで大学生の健康や生活価値観に対する意識を検討するためにアンケート調査を行った。

【方法】 大阪府下の大学生、短期大学生、専門学校生の男子182名と女子811名を対象に、1996年10月から12月に食生活や生活価値観に関するアンケート調査を行った。

【結果】 家族と食事をしながら話をするを「楽しみにしている」と答えた割合は男子(40%)よりも女子(53%)で多かった。現在の食習慣に対して「健康に良い」と答えた割合は男女各々36%、40%と少なく、「健康に良くない」は男子(57%)の方が女子(46%)よりも多かった。働くことについて、「収入のため」は男子(38%)と比べて女子(50%)が多く、次に男子では「働きたくない」(19%)、女子では「働ける幸福」(18%)が多く、労働に対する意識に性差がみられた。日本的な習慣に対して「人々の絆や支えになっている」は男女各々44%と55%で、男女ともに伝統的な習慣に対して批判的傾向がみられた。大事なこととして、「助けあって生活する」が男女各々71%と90%で最も多く、「家族への責任」や「地域への貢献」は8%以下と少なかった。現在の生活に対して男女ともに「現実を受け入れる」(男女各々39%と34%)が最も多く、「快適である」は男子26%、女子32%と少なく、現在の生活に対して満足度が低いことが示唆された。